

江戸版仮名法語の本文

―近世前期における江戸版本文の特性（2）―

母利司朗

はじめに

近世前期に江戸で出版されたいわゆる江戸版の性格を明らかにする一環として、前稿^①では江戸版の御伽草子を具体的に二作品とりあげ、その「原稿」となったと思われる上方版本文との関係について考察した。

とりあげた作品のかぎりでは、江戸版の本文は総じて上方版に忠実であり、異同のある箇所についても、ケアレミスと思われる箇所はあるものの、読者にとつてより読みやすいという方向への改変と認められる箇所も少なくない。江戸版にたいしてのある種先入観ともいべき「杜撰」さは、少なくとも取り上げた二点の御伽草子作品の中には、かならずしも認められなかった。

本稿では、当時の出版目録の分類で「和書」「仮名」、あるいは「法語」などと呼ばれた雑多な作品群を対象とし、前稿と同様の方法によって江戸版本文の性格を考察してみたい。これらは、多くが儒教・仏教に基づいた平易な教訓書で占められ、今日の文学史研究で「仮名草子」とか「仮名法語」と称されるものにあたる。作品によって異なる

が、これらには写本による流布の時代をもたない物が多い。その意味で、上方版の版種さえ少なければ、江戸版との比較はかなりしやすく、取り上げるべき作品を絞り込みやすいという利点がある。

また、「仮名」と称されるものの、漢文体ではない、というだけで、本文にはかなり多くの漢字、漢語が使われている。上方版におけるこれらの漢字表記が江戸版ではどのように処理されていたか、という点で、前稿であつかった御伽草子の場合との相違を考えてみる必要があるであろう。

検討の結果、本稿では、『夢遊集』と『法灯国師法語』という二作品を取り上げることとした。前者の『夢遊集』には、細かく見れば上方版が数種あるが、いずれも基本的には同じ板木を用いたものであり、江戸版との比較に支障はない。後者の『法灯国師法語』にも上方版が複数あるが、いずれも同じ板木によるものかもしれない。覆刻関係にあるものばかりであり、これも江戸版との比較に支障はない。

一 『夢遊集』

『夢遊集』⁽²⁾には上方版が数種伝わるが、下巻末尾の尾題「夢遊集下終」の次行に「慶安三庚寅曆孟冬吉旦」の刊記を刻むもの（国文学研究資料館蔵本〈ナ4／172／1ゝ3。横山重旧蔵〉）が初版である。最も伝本の多い版種は、右の「慶安三庚寅曆孟冬吉旦」有刊記版と本文部分は同版ながら、刊記を、

慶安三年孟冬吉日

柳馬場通錦上ル町

木戸嘉兵衛板

と入木で改めたものである（国立国会図書館、京都大学文学研究科図書館、九州大学附属図書館、慶応義塾図書館〈旧阿波国文庫蔵〉、駒澤大学図書館、西尾市岩瀬文庫など）。筑波大学附属図書館蔵本は、木戸嘉兵衛版の「柳馬場通錦上ル町／木戸嘉兵衛板」を削り、そこに二重の匡郭の中に「四条坊門通東洞院東エ入町／水田甚左衛門開板」と刻んで入木したものである。以上は、慶安三年以降ほどないころに出版された上方版であるが、同じ上方版でも、天保ころに、外題を「夢遊集 鴨長明上」（上巻）と記す後印本も出版されている（国立国会図書館、京都大学文学研究科図書館、大阪大学附属図書館、富山市立図書館山田孝雄文庫など）。いずれも基本的には初版と同じ板木を用いての出版である。江戸版との関係を考えるにあたっては、上方版において最も流布したと思われる木戸版（京都大学文学研究科図書館・国文学／頼原文庫／Tq 13 図1）をとりあげる。

江戸版は、題簽を「（絵人）ねざめ草」とし、「寛文十三年癸丑歲初春吉旦 松会開板」の刊記と、師宣風の挿絵をもつ。当時続々と出版された、『めざまし草』『ねごと草』『ひそめ草』などと同様の『徒然草』に倣った随筆の一つとして意識され、改題された書名であろう。伝本は、国文学研究資料館蔵本（ナ4／380 図2）が伝わるのみ。

まず、前稿でも最初に言及したような、従来から江戸版の特徴と指摘されてきた漢字・仮名の置き換えや多用、という点から確認してみたい。

『夢遊集』の上方版は、前稿であつかった御伽草子と比べて格段に漢字の使用率が高く、それを江戸版がいかに仮名に置き換えているのが注目されよう。一つの目安として、「煩惱」「菩提」「無常」「修行」「妄念」「菩薩」「衆生」「地獄」といった頻出する仏教語の漢字表記が、江戸版ではいかに表記されているかについて調査してみた。上方版においてそれらの漢語がもともと仮名表記されているものについては調査の対象から外している。その結果は次の通りである。

	漢字↓漢字		漢字↓仮名	
菩提	0		10	
菩薩	0		7	
地獄	1		7	
無常	21		0	
衆生	24		1	
修行	16		14	
妄念	3		8	

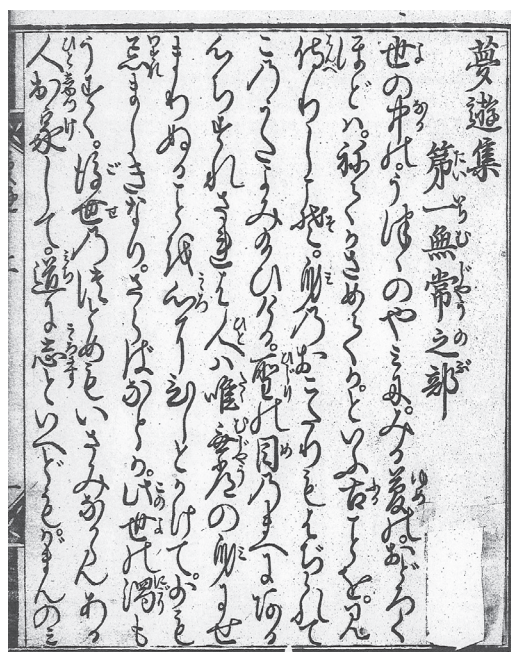


図 1

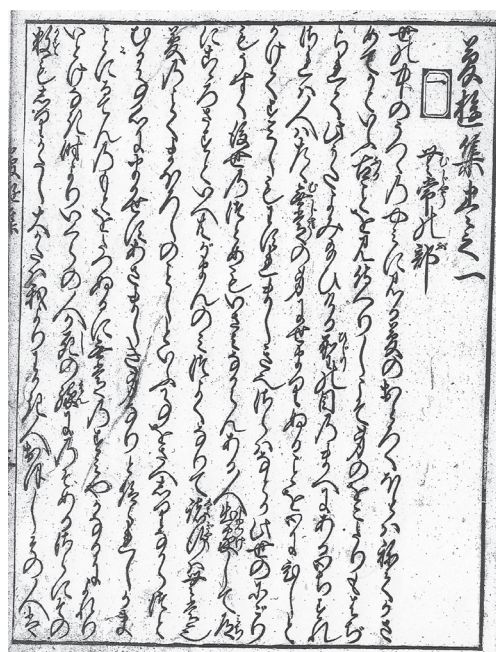


図 2

「菩提」「菩薩」「地獄」については、漢字を仮名に置き換える傾向がはつきりと見られるが、「無常」「衆生」では、逆に漢字はまったくといってよいほど仮名に換えられていない。また、「修行」「妄念」については、どちらとも言えない。この三通りの処理についてなんらかの理由をつけるとすれば、その漢字が一般的に難しいと思われるかどうかによつての処理の異なり、というくらいしかない。たとえば、漢字が仮名に置き換えられているタイプにあげた「地獄」は、江戸版においてはすべて「地こく」の表記であり、易しい「地」は漢字のままになっていることによつてもうかがえよう。

では全体を通して、本当に漢字の難易度に基づいて漢字から仮名への置き換えがなされているのか、といえは、かならずしもそうは認められないのである。たとえば、

①さて夏のなつこすゑもしげりあり茂ゆふだち相むて、夕立ゆふだちのふり通とおる空そらの郭公ほととぎすの一ひとこゑ

に、心もすみわたりて

(上・「第一無常之部」括弧内は江戸版の表記。以下同)

②信心しんはよく煩惱ぼんごの本ほんを滅めつし、よく専仏せんぶつの功德くどくに向むかふ。信心しんあ

れは、境界きやうがいに著ちやくせず。

(中・「第七信心之部」)

のような漢字が仮名へと顕著に置き換わっている所についてみても、上方版で用いられた漢字がすべて難しい漢字であったとはいいたいがたいからである。また、

③ 答ていはく、事相は修行なり。修行なき人は、理の血脉を

〔ゆきやう〕

つぐ事なし。

（中・「第五仏法に脉の有部」）

④ 古哥にも、終に行道といひて、つゝに死すとはいはず。

（つゝ）

（終）

（下・「第九雑談の部」）

のように、同じ言葉（「修行」「終」）がすぐ近くで漢字・仮名を異にして置き換わっていたりという具合に、江戸版の版下を担当した筆工に、漢字と仮名の置き換えに関わる何らかの原則、判断基準があったとは思えないのである。

仮名遣いについては、煩雑に過ぎるので数量的に示すことは出来ないが、上方版との間で意外なほど異なりが少なかった。上方版の漢字には逐一振り仮名が付けられており、本文の仮名表記と合わせて、多くはそれに従ったということなのであろう。

ついで本文の異同について述べる。江戸版が、上方版の本文を明らかに写し間違え、不適切、不明瞭な本文となつてしまった箇所は、小異を除き、次の八カ所である。

⑤ 仏と衆生とも一心。迷ひと悟と一心。信と行と一心。有と無と一心。善と悪と一心。一切の法、皆一にして、別にものをみず。万事は一法となり、事にあたりて一念もまよはざるを、一心といふなり。

（上方版・上「第三得手に法を聞の部」）

仏と衆生とも一心のまよひとさとりと一心、信と行と一心、有と無と一心、善と悪と一心、一切の法みな一にして、別に物をみ

す。万事は一法なり。（江戸版）

⑥ 信心は、あかもなく濁もなし。驕慢を除き、恭敬の本となる。

又仏法の蔵の中に第一の宝也。清浄の手となりて、一切の行をうけとり、人に物をほどこして、をしむ事なし。

（上方版・中「第七信心の部」）

信心は、あかもなくにこりもなし。けうまんをのそぎ、恭敬の本となる。又仏法の蔵の中に（欠）しやうじやうの手となりて、一切の行をうけとり、人に物をほどこして、おしむ事なし。

（江戸版）

⑦ 説ときは一寸、修する人は一丈と云事あり。是は、口に云はやすくして功德すくなく、修行はかたくして功德多しと云理なり。又利口はいひやすし、善根は修しがたしとあり。又悪をやめ善を修せよと云事は三子もしるといへども、八十のおきなも行ずる事はかたしとあり。

（上方版・中「同」）

説ときは一寸、しゆする人は一丈といふ事有。是は、口にいふはやすくしてくつくすけなく、修行はかたくして功德おほしと云理なせは、心のくらひやすし。善根は修しかいのらんとは、人悪をやめ善を修せよといふ事は三子もしるといへども、八十のおきなも行ずる事はかたしとあり。

（江戸版）

⑧ 仏舍利などは、漢土よりきたある事なれば、さのみうたかふべきにあらず。但し、しひて拜てもせんなし。人々の心中に仏性あり。仏性をみるときは、生身の仏をみる事、むかしの鷲の御山もいま目のまへにあるべし。むつかしく目の玉までみるほどの

望^{のぞみ}はありて、生身^{しやうしん}の仏をみるのぞみなきこそ本意^{ほんい}なけれ。

(上方版・下「第九雑談の部」)

仏舎利^{ぶつしゃり}などは、漢土^{かんど}よりきたある事なれば、さのみうたかふへきにあらず。た、し、しみておかみてもせんなし。人々の仏をみる事、むかしのわしの御山^みも今目のまへにあるへし。むつかしく目の玉まで見るほどのそみはありて、生身^{しやうしん}の仏を見るのそみなきこそほいなけれ。

(江戸版)

⑨又、盗人^{ぬす}はがきといひ、正直^{しやうちき}の人は仏なり。ものをころすは餓鬼^{がき}なり。生^{いける}を放は仏なり。

(上方版・下「同」)

又、ぬす人は(欠)がき也。生^{いける}をはなつは仏也。

(江戸版)

⑩我身^{わがみ}本より夢^{ゆめ}なれば、父母^{ふぼ}また夢^{ゆめ}なり。夢^{ゆめ}を夢^{ゆめ}にかへし、父母^{ふぼ}の身を父母^{ふぼ}にかへす時は、たとひ一命^{いめい}を捨^するとも、父母^{ふぼ}のいのちを父母^{ふぼ}に返^{かへ}すなり。

(上方版・上「第二父母孝行の部」)

我身^{わがみ}もとより夢^{ゆめ}なれば、父母^{ふぼ}もまた夢^{ゆめ}より夢^{ゆめ}にかへし、父母^{ふぼ}の身を父母^{ふぼ}にかへす時は、たとひ一命^{いめい}をすつる共、父母^{ふぼ}の命を父母^{ふぼ}にかへす也。

(江戸版)

⑪人をたのみとする故^{ゆへ}に、初^{はじめて}におもひたると違^{ちがひ}たるとき、かならずうらむるなり。しづかにおもへば、我身^{わがみ}もたのまれます。我心^{わがこころ}もたのまれます。いはんや、人のほむるをよろこひ、人のそし類^{るい}をかなしまんや。

(上方版・下「第九雑談の部」)

人をたのみとするゆへに、はしめに思ひたるとちかひたる時、かならずうらむる也。しづかに思へば、我身^{わがみ}もたのまれます。いはんや、人のほむるをよろこひ、人のそしるをかなしまんや。

(江戸版)

⑫軍^{いくさ}の陳^{ちん}に出る人の、敵身^{てきみ}かた入みだれたる時は、勇猛^{ゆうめう}にして命^{いのち}をおします。進^{すすみ}て死せん事をよろこひ、退^{しりぞき}ていきんはちをおもひ、一心堅固^{いっしんけんこ}なるゆへに、かねて兵法^{へいほう}ならはざれども、おもひの外に敵^{てき}をうつ事あり。

(上方版・下「第九雑談の部」)

軍のぢんに出る人の、(欠)命^{いのち}をおします。すゝみて死せん事をよろこひ、しりぞきていきんはちを思ひ、一心けんごなるゆへに、かねて兵法^{へいほう}ならはされ共、思ひの外に敵^{てき}をうつ事有。

(江戸版)

⑤から⑨は、上方版の傍線部の字句が抜け落ちたり写し間違えられたりして、結果的に意味の通らない文章となつてしまつてゐる箇所である。とくに⑦は、上方版を目で追つて版下を書写している筆工が、上方版の文章を、少なくともここに關しては理解できずに写してゐた^{としか考えられないような所である。}

江戸版の筆工は、当然のことながら、上方版の本文を読み、頭の中で解釈しながら写しとろうとしていたはずである。たとえば、

修行^{しゆぎやう}といふ修^{しゆ}の字は、飾^{かざる}とよみ、理^{おとこ}とよむなり。ぎやうとは善^{ぜん}を行^{ぎやう}ずる事なり。されは、上の人は心をおさめ、中の人は行^{ぎやう}をおさむ。下の人はなをかざるなり。名をかざるものは、行^{ぎやう}いまだ善ならず。行^{ぎやう}をおさむるものも、心いまだしりがたし。

(上方版・中「第八修行の部」)

修行^{しゆぎやう}といふ修^{しゆ}の字は、かざるとよみ、おさむるとよむ也。行^{ぎやう}とは善^{ぜん}を行^{ぎやう}ずる事也。されは、上の人は心をおさめ、中の人は行^{ぎやう}を

おさむ。下の人は猶かざるなり。名をかざるものは、行いまた善ならず。行をおさむるものも、心いまたしりかたし。(江戸版)

という所では、上方版の傍線部「下の人は名をかざる」は、そのすぐ下の「名をかざるものは」との関係から、「下の人は名を飾る」の意味であると読み取れる。ところが江戸版ではそこを読み違え、「猶飾る」としてゐるのである。おそらく、上の人、中の人と来たので、文脈から、「下の人は猶」としたのではないか。

また、

されば、衆生の本心は、有にあらす、無にあらす。生にもあらす、滅にもあらす。増こともなく減事もなしと、仏のとき給ふ。(上方版・中「第八修行の部」)

されば、衆生の本心は、有にあらす、無にあらす。生にもあらす、滅にもあらす。増にもあらす、滅にもあらすと、仏のとき給ふ。(江戸版)

という所でも、筆工は、『般若心経』の本文を引用した「有にあらす、無にあらす」という上方版のリズムを重んじ、傍線部「増こともなく減事もなし」の所をも「増にもあらす、滅にもあらす」と置き換えたのであろう。それによって、振り仮名のない形で二回繰り返された「滅にもあらす」の読み方や意味が、はつきりしなくなってしまったのである。

これらは結果的には間違つた本文となつてしまった所であるが、意味を吟味して書き写していったため、逆に上方版より良い文章となつた所もある。

口には、ひとへに物をいはざるか、又弥陀の名号を唱るか、此二を口の行とすると、天台の止観に侍べり。仏道修行の人は是をよく覚て、此二の外をばほいなく思ひて、人にまじらん時は、無言と念仏にて、怠共、せめて悪をいはぬやうにと思ひて、理にあたらぬ事はいはざるにはしかじと思ふべし。(上方版・同)

口には、ひとへに物をいはざるか、又みたの名号をとなふるか、此二を口の行とすと、天台の止観に侍へり。仏道修行の人はこれをよく覚て、此二の外をばほいなく思ひて、人にまじらん時は、無言と念仏こそをこたる共、せめて悪をいはぬやうにと思ひて、理にあたらぬ事はいはざるにはしかじと思ふべし。(江戸版)

上方版の「無言と念仏にて、怠共」という形でも、意味が通じないというわけではないが、江戸版の「無言と念仏こそをこたる共」の形がよりわかりやすい形であることは明らかであろう。

一方、⑩から⑫は、⑤から⑨と同様の理由で上方版とは異なつた本文となつてしまつた所であるが、まったく意味が通らないというほどではない。これらについては、筆工がこの程度の省略は問題ないと考えたのか、ミスではあるものたまたま大きな問題がおこらなかつたのかの区別がつかない。

江戸版版下の筆工は、上方版を可能な限り忠実に写していったが、上方版を手直した方がより良い文書になると考えた時は、臨機応変に改変を加えていったようである。不注意によるミスや、理由のわからない悪い方向への書き換えも少なからず認められるが、『夢遊集』全体としては、けつして質の悪い文章にはなつていない、と思われる

のである。

二 『法灯国師法語』

『法灯国師法語』には多くの版種があるが、江戸版の「原稿」となった版種を考えるさいにとりあげるべきは、正保二年版、正保四年版、慶安元年版、および無刊記版の四種である。

正保二年版（国文学研究資料館、京都大学附属図書館、駒澤大学図書館、東洋大学図書館哲学堂、龍谷大学図書館、仏教大学図書館など）は、巻末に「正保二年九月 利兵衛開」の刊記があるが、その下の匡郭の線に切れ目が見え、入木の可能性が高い。某本屋の出版（伝本不明）した板木を使い、末尾に入木をしたのであろう。版元名を、さらに「菊屋七郎兵衛」と入木した求版後刷本（駒澤大学図書館永久文庫）もある。正保四年版（東京都立中央図書館加賀文庫、酒田市立図書館光丘文庫、花園大学図書館今津文庫、母利など）は、一見、正保二年版と同じ板木を使い、刊記だけを「正保四丁亥年正月吉日」に改めたように見えるが、子細に見ると、被せ彫りによって版を改めたものであることがわかる。振り仮名に若干省略が認められる。慶安元年版もまた、正保二年版か正保四年版をもとに被せ彫りにしたもので、刊記を「慶安元歳霜月吉旦 小川源兵衛」とする（金沢大学附属図書館暁烏文庫）。以上の版本の本文や送り仮名にいたるまでの文字の形を踏襲しながら、一行あたりの字数を増やし、半丁あたりの行数も十行から十一行に増やした無刊記版もある（龍谷大学図書館）。江戸版との

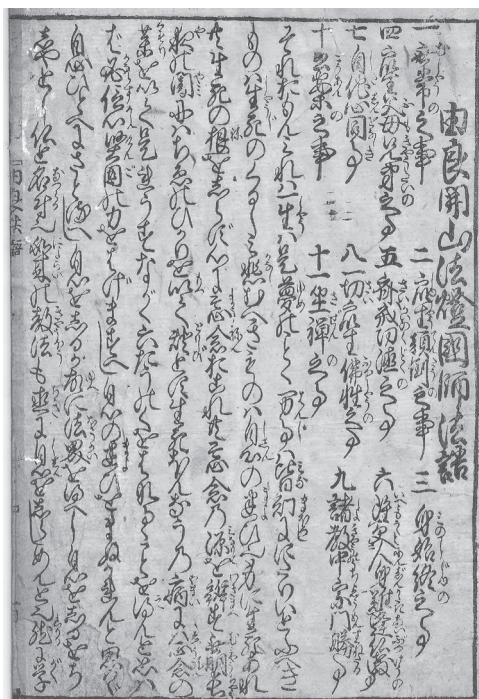


図 4

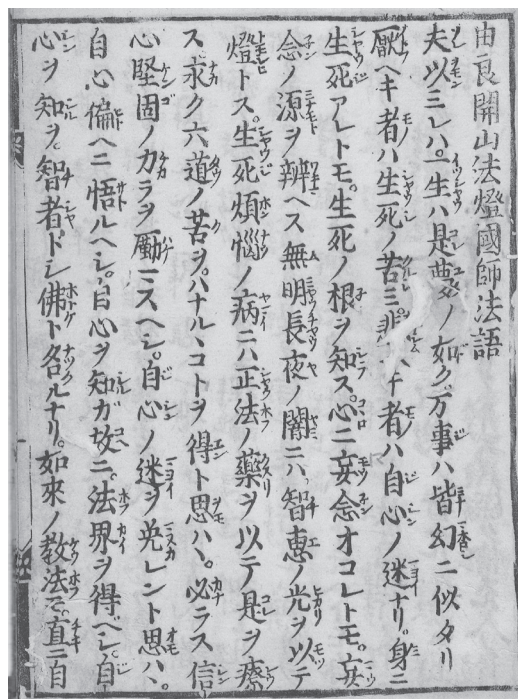


図 3

関係を考えるにあたっては、どの版種をとってもほとんど違いはないが、便宜上、正保四年版（架蔵本 図3）をとりあげることとする。

江戸版は、題簽を「由良／開山 法灯国師法語 ひら／かな」とし、

巻末に「明暦二丙申年季春吉辰 松会市郎兵衛板」の刊記をもつ本である。伝本は筆者蔵本の他にあることを聞かない（図4）。上方版が

半丁十行の片仮名交じりの本文であるのに対し、江戸版は、半丁十三行平仮名交じりの本文という点で、目で見たと時の印象が全く異なる。

ただし柏崎順子氏の御調査によれば、明暦以前の「松会市郎兵衛」の名を刻む出版物は、多くが、「京版の覆刻または求版」であるといふ。

その意味では江戸版として取り扱うのに慎重である必要があるが、同時期の「松会市郎兵衛」版で、かつ似通った版下の書式をもつ『二休和尚法語』（明暦二年丙申三月日）刊。駒澤大学図書館蔵（H180

／113）。図5は架蔵の後印本）は、「京版の求板でも覆刻版でもない」とされる。本書『法灯国師法語』についても、今後、版下を同じくする京都版が判明すれば話は変わってこようが、現段階では、松

会の独自に作った版下様式であると想定した上で考察を進めていきたい。

『夢遊集』と同じく、まず、漢字・仮名の置き換えや多用、という点を確認する。

『法灯国師法語』の上方版は、漢字片仮名交じりの本文である。対して江戸版はそれを漢字平仮名交じりとしている。その上で、漢字・

仮名の置き換えになんらかの傾向が見られるかどうかを見てみた。たとえば、『夢遊集』で取り上げたような仮名法語特有の仏教語「菩提」

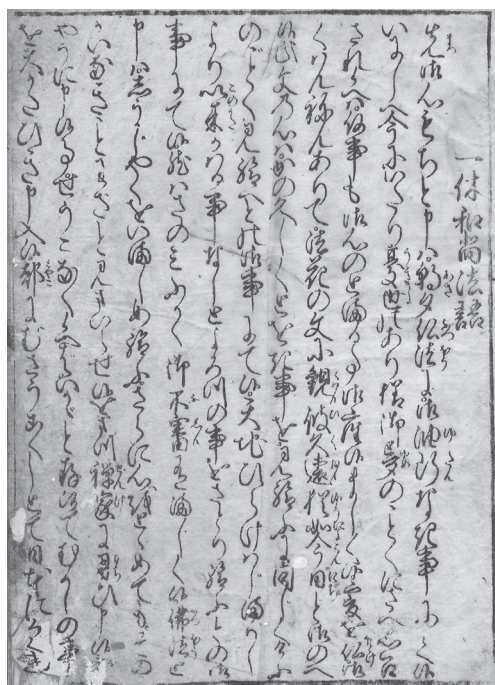


図5

「無常」「修行」「菩薩」「衆生」「地獄」は本書にも頻出する。その結果は以下の通りであった。

	漢字↓漢字		漢字↓仮名	
	漢字	仮名	漢字	仮名
地獄	1	10		
菩提	0	3		
衆生	20	0		
菩薩	6	0		
修行	6	0		
妄念	3	0		
無常	9	3		

ご覧のように、漢字から平仮名に変えられたのは「地獄」と「菩提」

のみで、「衆生」「菩薩」「修行」「妄念」は漢字のまま。「無常」のみ、漢字と平仮名にやや分かれる。「菩提」と「地獄」については、『夢遊集』においても漢字から平仮名への置き換えが認められたので、傾向が一致しているが、「菩薩」が漢字のままであるのは、『夢遊集』の場合と異なる。この違いには合理的な説明が思い浮かばない。

また文中で目につくのは、上方版の「如し・如く」「なり」「云へども」が、それぞれ江戸版で「ごとし・ごとく」「也」「いへ共」に置き換えられていることである。これらは仮名法語だけに頻出する特有の言葉ではなく、どのようなジャンルの文章にも普通に出てくる言葉であるが、「如」が仮名に置き換えられる一方、なぜ「なり」が逆に漢字になり、「云へども」がわざわざ「いへ共」になるのかについても、説明はつかない。

江戸版において、難解な文字ほど仮名に置き換えられやすいという傾向の認められないことは、先の『夢遊集』においても指摘した通りであり、江戸版における仮名の多用という現象に、なんらかの原則的なルールを見いだすことは、今の時点では困難であると言わざるをえない。

ついで本文の異同について述べる。江戸版が、上方版の本文を明らかに写し間違え、不適切、不明瞭な本文となってしまった箇所は、小異を除き、次の三カ所のみである。

①夫有為フレウイノタノシミハカリナキモ、法界ホフカイニアマネカラズ。

(上方版・第二)

夫有為それうみの樂がはりなきもほうかいにあまねからず。(江戸版)

②良藥リヤウヤクハ口クチニ苦シト云ヘトモ病根ビヤウコン平愈ヘイユシ、毒藥ドクヤクハ口クチニ甘シト云ヘトモ身命シニミヤウヲ損害ンシガハス。故ユヘニ知ヌ、世間セケンノ五欲ゴヨクハ樂ト云ヘトモ、地チゴクニ墮ヲチテ出期イツルゴナシ。

(上方版・第二)

良藥は口りやうやくににがしといへ共病根へいゆし、どく藥は口にあましといへ共(傍線部なし) ぢごくにおちて出期いづるなし。(江戸版)
③是コレスナハチ地獄門サゴクモンヲイツル要道ヨウダウナリ。
是則コレぢごく門を要道也。
(上方版・第二)
(江戸版)

①は、「ハカリナキ(計りなき)」が「かはりなき(変はりなき)」という言葉に変わってしまい、意味が違ってしまった所であるが、もともととは、版下を担当した筆工が、「は」と「か」の順を読み違え、単純に写し間違っただけの原因によるものである。

このような一文字程度の小さな読み違いは、他にも、「諸仏↓仏仏(上方版↓江戸版、以下同)」「(第三)」「持齋サイ↓持齋かい」「(第四)」「仏心ヲ会得シテ↓仏心を会得ぞ」(第九)、「明アキラメ↓明ミシ」(第十二)のように散見される。これらはささいなミスにすぎないと言えるが、ことに、「仏心ヲ会得シテ」(上方版)が「仏心を会得ぞ」(江戸版)になった原因をさぐってみることによって、江戸版版下の作成過程が判明することは興味深い。「仏心ヲ会得シテ」(上方版)は、図6のように、片仮名「シテ」の合字の右横に、句読点に相当する符号「。」が置かれている。それを江戸版の版下筆工が濁点の符号と見誤り、片仮名の「ゾ」と理解してしまったのであろう。

また次の②も、版下筆工が何を写していったのかをよく示している。この前後は、上方版では、図7のように、「云ヘトモ」が並ぶように

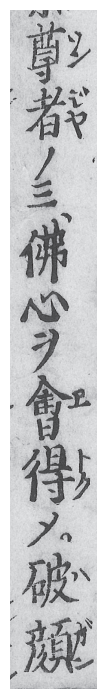


図6

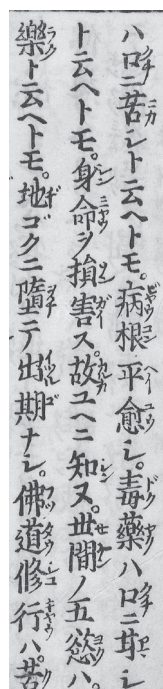


図7

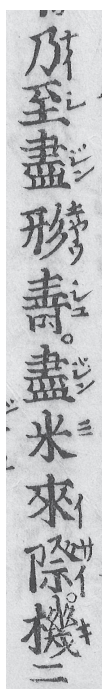


図8

横に置かれている。二つ目の「云へトモ」と三つ目の「云へトモ」は、各行の中でほぼ同じ位置にあり、いわゆる目移りによって、「身命ヲ損害ス。故ユヘニ知ヌ、世間ノ五欲ハ樂ト云へトモ」が抜け落ちてしまったのである。

一方、江戸版筆工の教養を示すものとしては、「尽米來際」(第五図8)という誤り(正保二年版も同じ)を、江戸版で「尽未來際」と、正しい形に改めた所が、一カ所だけだが認められる。

全体として見れば、江戸版『法灯国師法語』の版下本文には、致命的な誤りは少なく、時には上方版の誤りを訂正しつつ、ほぼ忠実に上方版を翻刻していった様子がうかがえよう。

おわりに

前稿であつかった江戸版御伽草子二作品については、上方版との間に意外なほど異同が少なく、本文の良質であることが指摘できた。今回あつかった仮名法語についても、写し間違ひによる単純なミスこそ認められるが、少なくとも、手を抜いた杜撰な処置によって悪い本文が生まれたというような現象はほとんど認められず、逆に版下を担当した筆工の良心的な作業の痕跡さえすくなく見いだされる。前稿の繰り返しとなるが、あらためて、江戸版の本文についての再評価が必要となろう。

【注】

- (1) 「江戸版御伽草子の本文 ―近世前期における江戸版本文特性の研究(1)―」(『和漢語文研究』十三号・平成二十七年刊)。
- (2) 『夢遊集』については、『京都大学蔵頼原文庫選集』第一巻「好色本・遊女評判記・仮名草子・浄瑠璃」(平成二十八年 十二月 発刊予定・臨川書店)に筆者が木戸嘉兵衛版を翻刻し、「解題」を執筆している。
- (3) 「江戸版考」(『一橋論叢』第百三十四号・平成十七年刊)。
- (4) 「江戸版考其二」(『人文・自然研究』第一号・平成十九年刊)。

【付記】

本稿は、平成二十八年年度日本学術振興会科学研究費補助金課題研究

「近世前期出版における江戸版本文の特性研究」(基盤研究C・15K02253)による研究成果の一部である。図版のうち所蔵者を記していないものは母利蔵本である。写真掲載を許可された諸機関にあつくお礼申しあげる。

(二〇一六年六月二十三日受理)

(もり しろう 文学部日本・中国文学科教授)